市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今回で48回目を迎えました。市内の小・中・高等学校から寄せられた119編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。

★小学校中学年の部

「かぐやのかご」を読んで

高津小学校３年
大岡　咲耶香さん

わたしは、「かぐやのかご」という本を読みました。この本をえらんだ理由は、この本に出てくる主人公がわたしと同じさやかという名前だったからです。この本を読んでいくと、主人公のさやかとわたしがにているなと思うところがいくつかありました。

主人公のさやかは、学校でおならをしたというぬれぎぬを着せられ、帰り道でないていました。そこに、ザル作り名人のおばあちゃんがあらわれます。おばあちゃんは、さやかをからかう男子をしかってくれました。そして、話をしたり、ザル作りしたりしていくうちに二人はなかよくなっていきます。

この本を読んで、わたしは自分のことを思い出しました。わたしもぬれぎぬを着せられたり、からかわれたりしたことがあります。わたしは、ぬれぎぬを着せられたとき、「自分じゃないよ」と言うことができました。でも、ときどきはっきりと自分の意見を言えないときもあります。だから、さやかの本当のことを言えない気持ちも少し分かる気がします。さやかは自しんがないから遠りょして、自分で「ちがう」とはっきりと言えなかったのだと思います。わたしは、さやかの心は少し弱いなと思いました。でも、おばあちゃんの「自分から人のつみをかぶっていれば、きれいになるんだな」「つみを人のせいにする人よりずっときれいになるよ」という言葉を読んで、それまでの考えが少しかわりました。さやかは本当のことを言ったら、きずついてしまう友だちがいたから、言えなかったのだと思います。そう考えると、さやかはやさしい人だと思えました。さやかの心は弱いのではなく、やさしくてきれいな心なのかなと思いました。さやかもおばあちゃんの言葉を聞いたとき、「自分はいいことをしたんだ」と、モヤモヤしていた気持ちがスッとしたと思います。さやかの心はおばあちゃんの心がうつって、少し心が強くなったように思いました。

おばあちゃんは強いなと思ったところは、もう一つあります。それは、さやかをからかう男子から守ったところです。悪いことをしている人たちに自分の思ったことをきちんとつたえられるのは、すごいことだと思います。おばあちゃんは、ゆう気があって人の気持ちが分かるやさしい人、きれいで強い心を持った人だと思いました。ぎゃくに、人をからかったり、意地悪をしたりする人は、強そうに見えても、本当は弱い心を持っているのだと思います。

わたしは、この本を読んで、だれにでも弱い心と強い心があるのかなと思いました。みんな一人一人にいいところがあって、やさしい心があるはずです。でも、少し自しんがなかったり、意地悪してみたくなったりして、強い心も弱い心にかわってしまうのだと思いました。わたしは、おばあちゃんのように悪いことはいけないとはっきりと言える強い心で、さやかのようにやさしくきれいな心をいつまでも持っていきたいなと思いました。

※読んだ本「かぐやのかご」
塩野　米松（佼成出版社）

★小学校高学年の部

「奮闘するたすく」を読んで

中西小学校６年
原　雄翔さん

ぼくは、ぼくの曽祖母と佑の祖父とを重ね合わせながら、この本を読んだ。

ぼくの曽祖母は、現在九十七才だ。去年施設に入ったが、それまでは一人暮らしをしていた。近くに住んでいる祖父と祖母が曽祖母の家に通って身の回りのお世話をしていた。お母さんが祖父の家に

通ってお世話をしている佑の家と似ているなあと思った。

この本は、元刑事の佑の祖父が認知症を発症し、デイサービスを利用したことがきっかけで、担当の早田先生にデイサービスで見聞きしたことをレポートして夏休みの自由研究として提出しなさいと言われたことから物語が始まる。

ぼくの曽祖母も以前デイサービスに通っていた。デイサービスに週一回行く以外は、畑で野菜を作ったり、料理、洗たく、掃除などもやり、何でも自分一人でできるほど元気だった。けれども、おととしくらいから少しずつ認知症が進んでいった。家のトイレで転んで骨折し、手術することになって入院したことから認知症がさらに悪化し、体も今までのように動かすことができなくなった。今ではぼくの名前もすっかり忘れてしまったが、ぼくが面会に行くと、とても素敵な笑顔を見せてくれるので、ぼくは行って良かったなあといつも思う。

曽祖母は、佑の祖父とは違ってデイサービスに行くのをとても楽しみにしていた。それは、曽祖母の友達はみんな亡くなってしまっていて家の近所には話し相手がいなかったが、デイサービスにはたくさんの話し相手がいたからだろう。だからぼくは、はじめは理解できなかった。なぜ佑の祖父がデイサービスに行くことをこんなにも嫌がっているのか。なんて頑固なおじいさんなんだろうと思っていた。

しかし、佑の祖父はもともと負けず嫌いな性格だということを考えると、なっ得できた。レクリエーションで『おさるのかごや』に合わせて手拍子をするというおゆうぎをする時に「こんな子どもみたいなことはできない。わしゃ帰る。」と強く拒絶した。佑の祖父はまるで小さな子どものようにあつかわれたと感じてショックを受け、プライドが傷付いたのかもしれない。だからあんなにも、デイサービスに行くことを嫌がったのだろう。

この本を読んで、ぼくなりに考えたことがある。ぼくは介護する人は、介護される人の気持ちや考えに寄りそうことが大切だと思う。なぜなら、介護されるお年寄りも人それぞれ性格や考え方が違ったり、個性があるからだ。相手がどのように接して欲しいかよく考えて介護していくことが必要だと思った。でもそれは、ぼくが考えている以上に難しいことだろう。ただ、だれでも人から話しかけてもらうことは、とてもうれしいことではないだろうか。

ぼくも曽祖母がどのようにしてほしいかをもっと知りたいと思った。まずは、今まで以上に会いに行き、素敵な笑顔を見ようと思う。

※読んだ本「奮闘するたすく」
まはら　三桃（講談社）

★中学校の部

人を知るということ

中西中学校２年
後藤　颯志 さん

「善い人を好み、自分もそうでありたい」

これはごく普通の考えだと思う。善い人とは一緒にいたいし、反対に悪い人とはあまり関わりたくない。でも僕は今まで、第一印象やその人の一部分だけを見て、善悪を判断していたのかもしれない。なぜこのような事を考えるに至ったかというと、「アウトサイダーズ」という一冊の本を読んだからである。

主人公、ポニーボーイの住んでいる町は、白人系で裕福な「ソクス」とメキシコ系で貧乏な「グリーサー」の二つに分かれていた。恵まれた環境のソクスとは違い、グリーサーは悲惨な生活をしており、また当然のごとく差別されていた。だがグリーサーもやられてばかりではなく、力をもって反抗していた。グリーサーは相当な不良集団だった。

ポニーはその不良集団グリーサーの一員。貧しい彼が他のグリーサーより恵まれていたのは、保護者である二人の兄が彼に居場所を作っていた事だ。差別された町に腐らず、懸命に働く長兄ダリー。明るい性格でとても優しい次兄ソーダ。この二人が心の支えとなっていたので、ポニーは他のグリーサーと違い温和だった。だから、僕には近く感じられる存在だった。

そんなポニーには親友がいた。弱々しい外見だが、優しく強い心を持ったジョニーだ。最初は頼りない友に見えた。しかし本を読み終えた今、僕は彼がとても好きになった。

ポニーとは違い、ジョニーは家で虐待を受けており、居場所がなかった。外へ出てはソクスに差別され、いつも怯えて過ごしていた。しかし彼は、ポニーがソクスに襲われて殺されそうになった時、ソクスの一員をナイフで刺して彼を助けた。力の差が大きく、正当防衛であるとはいえ、人を刺し殺してしまった事は決して許されない。でも僕は、友を助けるために勇敢だった彼は称賛に値する、とも思った。

その後、グリーサーの言い分なんか聞く耳を持たない警察から逃げている時の話。

ポニーが朝陽を見ながらふと、ロバート・フロストという詩人の詩を読んだ。

『誕生のとき、緑は黄色／すぐに消えてなくなる色／誕生のとき、葉は花／だが、それも一刻のこと／やがて、葉は葉／エデンは悲しみの園と化し／暁も昼に変わる／ひとつとして黄金のままいられるものはない』

ジョニーは詩の意味をすぐ理解して「これは俺が言いたかった事だ。」と歓喜した。

しかし僕には訳がわからなかった。何度読み返してもよく分からない。それでも心で繰り返しているうちに、「黄金」とは、人が輝く時の事で、ジョニーは、自分にも黄金の時がある、と希望を持っているのではないかと考えるに至った。「黄金の時」の短さを嘆く詩の内容より、一瞬でも、その時があるという事を喜ぶジョニー。瞬間で詩を理解して前向きにとらえる彼は、僕の比ではないほどに心が成長しているんだと思った。

ジョニーが勇敢だったのは、ポニーを守った時だけではなかった。教会の火事に遭遇した時も、火の中に飛び込み、子供達を助けに行ったのだ。普通は足がすくんで動けないと思う。でも彼は、迷うことなく飛び込んでいった。そして、ジョニーは子供達を助けて死んでしまった。彼は、自分が英雄になった事も知らずに、失意のまま死んでいったが、僕は彼に「黄金の時」があったと言い切れる。なぜなら、彼は親友の命を救い、子供達の命も救ったからだ。決して幸せとは言えない人生でも、意味のある人生だった、と思う。

僕がこの本でもう一人、深く考えさせられた人物がいる。名前はダリ。

ジョニーとは正反対の存在で、グリーサーで一番の悪人だ。僕は凶悪な彼が大嫌いだった。印象が変わったのは、ジョニーがソクスを刺した後だ。二人を逃がすためにダリは、身の危険も顧みず力を尽くした。この時は不思議に思ったが、今思えばダリにとってのジョニーは大切な存在だったのだろう。社会と親に見放された同じような境遇の中、前向きで優しさを失わないジョニーは、ダリにとっての希望の光だったのかも知れない。

ジョニーの死でダリの心は壊れた。弾の入っていない銃を振り上げ、取り囲む警官の中に飛び込んで射殺されてしまった。自暴自棄となり破滅するダリの中に、友を尊敬する気持ち、友を大切に思う気持ちがはっきりと見えた。善といえる行動ではなかったが、僕の心に残ったダリは「悪」ではなくなった。

ジョニーとダリ、この二人の登場人物の印象が本を読み終えた今、最初とは全く違っている。僕はこれまで、悪い第一印象を持った人を一方的に拒絶してきた。でも今は、もっとその人に触れて深く考える事で、見える景色も変わるのではないかと思うようになった。これからは、第一印象やその人の一部分だけで判断せず、グリーサーの彼らのように強く結びついた人間関係を築いていきたい。

※読んだ本「アウトサイダーズ」
S．E．ヒントン（大和書房）

★高等学校の部

李徴が教えてくれたこと

益田永島学園
明誠高等学校２年
大庭　麗珠 さん

山月記という物語の主人公は、日々の不満が溜まり、ある時急に発狂し虎となった李徴という人物だ。彼が虎となった後親友の袁傪と再会した時袁傪は李徴がわかり、彼は袁傪に虎となった経緯とある願いなどを告げ、二人は永遠の別れをした。

この物語で私がまず注目したのは李徴の願いだ。それは、「詩人として世の中に名を残したい」というもの。李徴は元来詩人になりたかった。しかし完全な虎になりつつある今の自分では成し遂げられないから、親友の袁傪に伝録し後代に残してくれないか、とお願いしたのだった。けれど私は、李徴の願いは「自分のことを覚えていて欲しい」と言い換えられるのではないかと思った。なぜなら彼は、『俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、そのほうが、俺はしあわせになれるだろう。だのに、俺の中の人間は、そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ。』と袁傪に心のうちをさらけ出していたからだ。人間の自分への未練がどうしても残る悲痛の叫びに聞こえた。それに私が彼でもおそらく同じことを思うだろう。自分の存在を忘れられることとは、想像を絶するほど辛く、切なく、悲しいことだろうと。忘れて欲しくないから、形に残るように以前からなりたかった詩人として世の中に名を残そうと強く思い、彼は袁傪にそういったのかもしれないと感じ印象的だった。

そして李徴が話した虎となった経緯と、自分が虎になった理由に注目した。私は李徴の言葉にはっとした。

私は彼が聞いた闇の中の声は彼の中にいるもう一人の声ではないかと感じたのだ。そして、この声は自分自身に「逃げてもいいんだよ」と言い聞かせ、誰もつくってはくれない逃げ道をつくっているのだと思った。私も自分の弱さに負けて逃げ道をつくってしまったことがある。もっともっと勉強して偏差値を上げたくて、今以上の努力しようとする思いとしなくてはいけないという使命感。周りからの期待に、それに応えようとし自分自身にかけるプレッシャー。色々なものが私に圧力をかけてくるように感じた。うまく結果が出ない私。私自身も周りの人も、私を苦しめたくてそうしてるわけではないとわかっているのに、勝手にプレッシャーを感じ勝手に負の気持ちになっている私。そんな私がいやでいやでたまらなくて私は私に失望した。でも、それを認めたくなくて「才能がな

い」「できが違う」などのそんな言い訳ばかりの逃げ道をつくった。自分も逃げたから、だから彼の言葉は情けない自分の言葉に聞こえて耳が痛くなった。

李徴が虎になった理由について述べている場面では『俺はしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣にあたるのが、各人の性情だという。俺の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。』という言葉だ。もし私の中に猛獣がいるとしたらそれはきっとキツネだ。昔話に出てくるキツネは自信満々に語り自分を偽って嘘を吐くというイメージがある。まさに自信のないくせに人には弱いところを見せたくない私のようだし、猛獣ではないが逆にそれが私にぴったりだと思う。姿がキツネになっていく自分を思い浮かべてみた。気がつくとだんだん完全な獣になっていく。つまり人間であった私が私の中から消えていくということ。誰も私を私と気づかない。これは人に忘れられるのと同じくらいなんとも言えない気持ちになるのだろう。

だからこそ「私」の中のもう一人の「私」にすべて呑み込まれてはいけないのだ。必ず人間の中には二つ以上の感情が常に存在していて、それが相反する感情だったとき、どうすればいいかわからずもがき苦しんだことがあると思う。しかし、ほんとうの「私」を見失ってはいけない。いや、ほんとうの「私」というのは少々語弊があるかもしれない。私が今ここで言いたいのは、その人それぞれの「芯」の部分のことだ。どんな状況であろうと、どれほど歳を重ねようとも、何か変わらないモノ。あやふやで言葉に表すことは難しくうまく伝えられないが、その「芯」の部分がぶれなければ李徴のように自分の中の猛獣に呑み込まれることはないと思うのだ。

山月記を通して、私は眼を背けたくなるような嫌いな私を目の当たりにした気がする。でもそんな私も私のかけがえのない一部だから、私は私を受け入れたい。それと同時に誰かの嫌いだという一部も受け入れられるような私でありたいと思った。

今以上の努力をしたい私。周りの期待に応えたい私。逃げてしまう私。心の中にキツネを飼っている私。私を受け入れたい、誰かを受け入れたい私。全部、すべて含めて私なのだ。

※読んだ本「李陵・山月記」
中島　敦（新潮社）

障がい者に関するマーク

～マークの意味をご存じですか？～

・施設や車などに表示されているマークを紹介します。
・多くの方に障がい者に関するマークを知っていただき、障がいのある方への理解をお願いします。

障がい者のための国際シンボルマーク
（施設等が表示するもの）

障がいのある方が利用できる建物や施設であることをわかりやすく表すための世界共通のシンボルマークです。このマークを見かけた場合は、障がいのある方への配慮ができるようにしましょう。

※このマークは「すべての障がい者を対象」としたものです。特に車椅子を利用する障がい者を限定し、使用されるものではありません。

【問い合わせ先】　市障がい者福祉課　☎31-0251